

## 花押による日蓮遺文の系年研究 ——〈248〉兵衛志殿御返事を中心として——

若 江 賢 三

本稿では、花押による日蓮文書の系年研究の一環として、『昭和定本』で「建治三年六月十八日、或弘安四年<sup>1)</sup>」とされている〈248〉兵衛志殿御返事の系年について考察する。本抄の花押は、バン字からボロン字へと移行<sup>2)</sup>する直前の花押である故に、その系年の追究は、ボロン字への移行の時期についてより正確を期する上でも重要な意味をもつことになる。

### 1. 鈴木一成氏の弘安元年説について

本抄本文は、

青鳧五貫文送り給び了んぬ。唱へ奉る南無妙法蓮華經一返の事。

とある。真蹟は京都本圀寺に所蔵されており、1紙の短い消息である。本抄は刊本の『録外御書』には収録されていないが、『本満寺録外』には収録されており（第6巻）、本抄が（弘安元年）6月26日付けの〈296〉の兵衛志殿御返事（真蹟は現在、越前今宿妙勤寺蔵）の後ろにつけられていて、本抄の奥書に、

本に云う、並（前？）の二通ハ越後の国に於て御自筆を以て書写し畢んぬ。

と記されており、両抄が17世紀の半ばの時点で真蹟が越後に保管されていたことが知られるのである。本抄は『高祖遺文録』では弘安4年に系年されているが、その真蹟花押はバン字となっており、弘安元年6月より以前のものであることが判明し、系年を改めざるを得なくなった。バン字からボロン字への移行について今日の段階で確認できる範囲では、弘安元年4月21日所顕の御本尊（立本寺蔵）においてバン字であり<sup>3)</sup>、ボロン字への移行が確認されるのが6月26日の3抄、すなわち〈294〉富木入道殿御返事、〈295〉中務左衛門尉殿御返事、〈296〉兵衛志殿御返事（図12）であった<sup>4)</sup>。その故に、8月21日付けの〈254〉の兵衛志殿御返事（図8、本文中に「いよいよはありあげてせむべし」とあり、内容からも建治3年の消息と認められる）及び8月23日付け〈255〉富木殿御書＝止暇断眠御書（図9）がバン字であることから、両抄が共に建治3年のものであることは疑いようがな

い。この両抄の花押の中でも、ことに富木殿御書（図9）の花押と6月18日付けの本抄の花押（図11）は似ているが故に（と推測されるが）、鈴木一成氏<sup>5)</sup>は「空点（アヌスヴァーラ）の筆法は鍵手後期の形を示している代表的なものである。正しく建治三年に系すべきである」と述べ、『真蹟集成』に携わった山中喜八氏<sup>6)</sup>も同じ見解をとり、こうして建治3年説が現時点における定説となっている。

これは、一見非の打ち所のない見解のように見えるのであるが、実は、そこに僅かな瑕疵が存している。その瑕疵とは、鍵手後期であれば即ち建治3年であるとする前提のためにか、その他の可能性についての検討を尽くさなかったところにある。冷静に考えると、可能性は建治3年の他にもうひとつあるのであって、これについての鈴木氏の考察が行き届かなかったのである。

## 2. 建治元年より3年までの花押の推移

そこで次に、建治2年より建治3年にいたる花押の変化のあとを辿ってみたい。まず建治2年の御書と確定できるのは、閏3月24日付けの〈215〉南条殿御返事＝大橋太郎書（図3）である。筆者が別稿<sup>7)</sup>において同年4月12日のものと推定した〈172〉国府入道殿御返事（図4）及び、南条抄（図3）の花押とアヌスヴァーラの曲がり具合が酷似した同年の7月2日のものと推定される大学三郎御書（図5）がある。建治2年の冬以降については、日蓮の体調が思わしくなかった<sup>8)</sup>故に、真蹟の残る御書及び御本尊の執筆は少なく、建治3年7月までのものと認められるのは、5月11日付けの宝軽法重事（図6）及び「建治三年」と日興筆で記される7月16日付けの〈252〉上野殿御返事（図7）くらいである。これら5抄の花押（図3～図7）を並べると、その特色はアヌスヴァーラが弓型にカーブを描いているところにあるといえる。筆者はこれを弓型の時期と名付けたい。

図7の上野殿御返事についてはこれを建治元年とする説（縮刷遺文）もあるが、これは建治元年7月の〈185〉南条殿御返事（図1）と同年12月の〈200〉強仁状御返事<sup>9)</sup>（図2）のいずれとも似ておらず、図1（鍵型）と図7（弓型）が同月に記された花押と見なすことはとうてい不可能である。故に上野殿御返事の日興筆による「建治三年」の年号は無視することはできない。内容から判断しても「大宮のつくらせさせ給へば」という記述があり、このことから建治3年がふさわしいと思われる。というのは、同年（5月11日）のものと思われる〈217〉宝軽法重事にも「大宮づくり」の語があり<sup>10)</sup>、その花押（図6）も弓型に近いものと言えるからである。これらのことを考えると、建治2年春頃より建治3年7月頃まで

## (14) 花押による日蓮遺文の系年研究 (若 江)

は花押のアヌスヴァーラは基本的に弓型であったと見るのが妥当である。もし本抄(図11)が建治3年のものであったとすれば、

図3(建治2年閏3月24日) → 図4(4月12日) → 図5(7月2日) → 図6(建治3年5月11日) → 図11(6月18日) → 図7(7月16日)

という順序で記されたことになり、本抄花押(図11)のみがアヌスヴァーラの形態において突出し、この流れにそぐわないのである。やや丸味を帯びて円形に近くなった弓型の宝軽法重事花押(図6)から長伸型の兵衛志抄花押(図11)へと一月を経て移行したと見るのも不自然であり、また図11から、その翌月には再び弓型(長伸)の上野抄花押(図7)へ移行したと見るのも、やはり不自然であると筆者には思われるのである。

### 3. 〈248〉兵衛志殿御返事の系年

ところで、本抄の花押(図11)はバン字ではあるが、バン字とポロン字の違いを別にするると、その形態は〈296〉兵衛志殿御返事の花押(図12)あるいは〈295〉中務左衛門尉殿御返事の花押に類似していることに、筆者は思いを致すことになった。

これまでの考察を総合してみると、本抄花押(図11)は弓型の流れである建治3年のものでないことは明かである。とすれば、本抄は、翌年の弘安元年の流れの中に位置づけるのが自然と思われるのである。その当否について、以下に検証しておきたい。

弘安元年の著述と見られる4月12日付けの〈243〉乗明聖人御返事<sup>11)</sup>(図10)と本抄花押(図11)とにおいては、その類似性が確かめられる。乗明聖人御返事については、日諦『祖書目次』以降『昭和定本』に至るまで建治3年(4月12日)に系年しているが、その花押(図10)は建治3年(5月11日)と見られる宝軽法重事の花押(図6)からわずか1月後のものとはとても思えないほどに趣を異にしている。一方、その花押(図10)を仔細に眺めてみると、バン字とポロン字との違いを別にするれば、図12の兵衛志抄や図11の本抄の花押とその形態はよく似ていることが認められるであろう。そして、それからさらに8ヶ月遡る時点で記されたのが建治3年8月23日付けの富木殿御返事(止暇断眠御書=図9)であり、その2日前に記されたのが8月21日付け〈254〉兵衛志抄(図8)であったとすれば、ほぼ流れはスムーズと言えるのではないか。図7から図8(弓型→長伸型)への変化もさほど急激なものとは言えないであろう。

以上を総括すると、図 11 の兵衛志殿御返事が弘安元年 6 月 26 日より以前に記されたことは確実であっても、それが建治 3 年でなければならないとする決定的根拠はなく、それは翌年の弘安元年であったと理解すべきである。

#### 4. 〈296〉兵衛志殿御返事との関係

そこで、次に問題となるのは、この弘安元年 6 月には、26 日に〈296〉兵衛志殿御返事も著されており、同一人物にわずか 8 日を隔てて続けて消息文を送ったことになるということである。しかし、そうした例は皆無というわけではない。例えば、弘安 3 年には南条時光に対して、1 月 3 日と 11 日とに消息が記されている<sup>12)</sup>。また、この年（弘安元年）は特殊な年であり、この直前の 5 月には日蓮の病状が悪化していた<sup>13)</sup>という状況を考慮すべきであろう。〈296〉兵衛志殿御返事には、

みそをけ一給ヒ畢ヌ。はらのけは左衛門どのの御薬になをりて候。又このみそをなめて、いよいよこちなをり候ぬ。

とあり、四条金吾の薬を 6 月 26 日のこの時点で初めて飲んだということではなく、また、この日にみそを初めて食したわけでもないと思われる。みそが届けられたのが 6 月 18 日の便であったとすれば、18 日の時点では錢 5 貫文の供養の御礼と、ある状況下で題目を何返唱えればよいか、という問い合わせへの短い回答とを記して待たせていた使者に持たせたのではないか。そして、その 8 日後になって、お陰様でいよいよ快方へ向かっているという報告を、四条金吾等への書状とともに再度池上氏にも記したと見られるのである。このように解すれば、両抄の間隔が 8 日であったとして辻褃が合うのではないか。池上宗長はこの年の 10 月にも日蓮の病状が悪化したという情報を得た直後に生和布等の見舞いの品を届けており<sup>14)</sup>、彼は主治医であった四条金吾との間で密接な連携を取っていたと思われる。

#### むすび

建治元年の 7 月には 2 日付けの〈185〉南条殿御返事（図 1）があり、年末になると、強仁状御返事の花押（図 2）のごとく、アヌスヴァーラはやや丸みを帯びてくる。そして建治 2 年になると、閏 3 月の〈215〉南条殿御返事（図 3）や 4 月の国府入道殿御返事（図 4）や大学三郎殿御書（図 5）等があり、アヌスヴァーラはやや平らな弓形となる。この時期の花押も独自の分類が必要であり、これを弓

(16)

花押による日蓮遺文の系年研究 (若 江)

型の時期として区分すべきことを提示した。

続いて建治2年の後期より建治3年夏にかけては御書自体が少なく、花押も多く現存しないのであるが、その中に建治3年5月の宝軽法重事(図6)があるのが貴重な手がかりとなる。その花押のアヌスヴァーラは、微妙ではあるが弓型から半円型へと変化して、さらに上野抄ではアヌスヴァーラに角度がつき(図7)、やがてそれが図8, 図9, 図10等の長伸型の時期を経て、弘安元年6月中旬に花押の本体がボロン字へと切り替わる。しかし、アヌスヴァーラを初めとする花押全体の形態については、引き続き、継続的に変化していたと見るべきであろう。



図 1



図 2

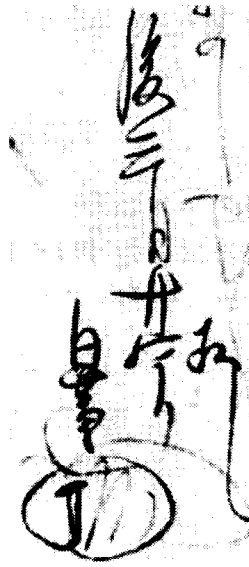


図 3

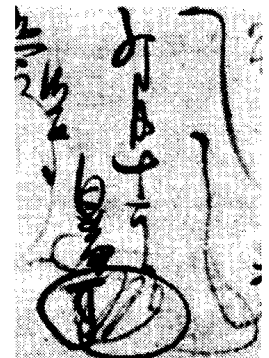


図 4

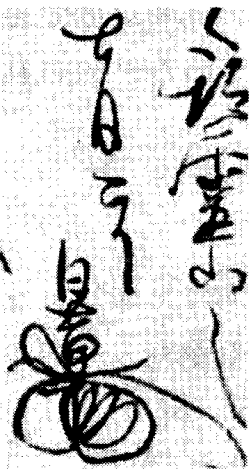


図 5

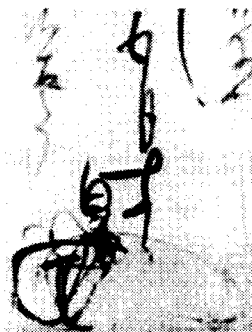


図 6

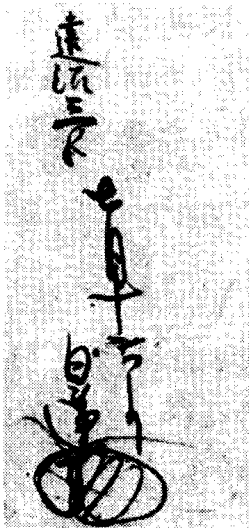


図 7

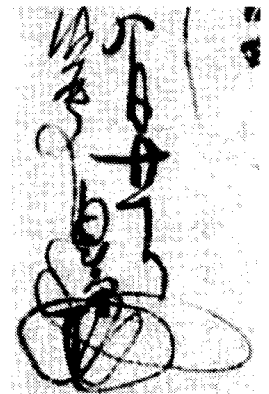


図 8

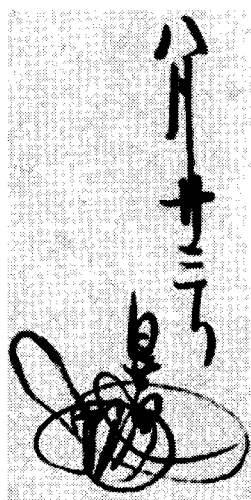


図 9

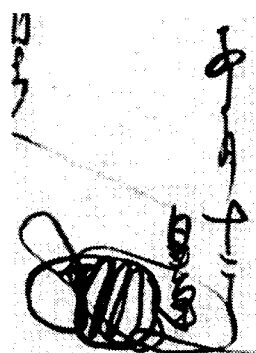


図 10

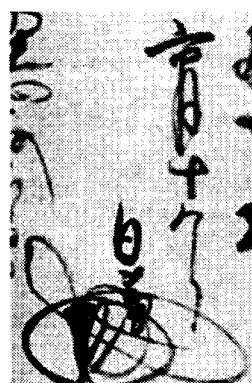


図 11



図 12

- 1) 『昭和定本日蓮聖人遺文』 p.1345 の脚注.
- 2) バン字からポロン字へと変化したことの意義については、大黒喜道氏の考察がある。同氏「事行の法門について (五) 弘安元年宗祖花押の変化をめぐって」(『興道』第10号, 1998) を参照.
- 3) 山川智応氏以来、消息文では弘安元年 (4月11日) のものとされる檀越某御返事がバン字の最後とされるが、筆者はこれを建治3年のものと考えている。若江賢三「御書の系年研究 (その6)」(『東洋哲学研究所紀要』第26号, 2010年) を参照.
- 4) 山川智応氏以来、5月25日付けの〈393〉日女御前御返事がポロン字としての最初の消息であるとされてきたが、筆者はその花押と内容から判断して、これを弘安2年のものと考えている。注3の拙稿を参照.
- 5) 鈴木一成『日蓮聖人遺文の文献学的研究』, 山喜房佛書林, 1965年 p.316.
- 6) 山中喜八「解説・花押集」(『日蓮聖人真蹟集成』第5巻所収).
- 7) 若江賢三「教行証御書. 国府入道殿御返事の系年について」(法華仏教研究会『法華仏教研究』第2号, 2010年) を参照.
- 8) 若江賢三「身延期における日蓮の健康状態の推移—建治~弘安年間—」(『印度学仏教学研究』第58巻第2号, 2010年) を参照.
- 9) 9月11に行われた日本印度学仏教学会第61回学術大会 (於立正大学) において、筆者の発表に対してコメントされた津守基一氏によれば、山上弘道氏は同抄の草稿本の記述より、本抄を文永11年に繰り上げるべきことを提唱されているとのことであったが、筆者は本抄は通説の通り建治元年12月のものとするのが妥当と考えている.
- 10) 同じく建治3年 (5月4日) と思われる〈333〉窪尼御前御返事にも「上宮の造営」のことが記されている。若江賢三「御書の系年研究 (その3) —身延期における「けかち」について—」(『東洋哲学研究所紀要』第23号, 2008年) を参照.
- 11) 注3の拙稿を参照.
- 12) 若江賢三「花押による日蓮文書の系年考—弘安年間—」(愛媛大学人文学会編『人文学論叢』第11号, 2009年) を参照.

(18) 花押による日蓮遺文の系年研究 (若 江)

13) 注8の拙稿を参照.

14) 前注に同じ.

〈キーワード〉 日蓮, 御書系年, 花押, 建治・弘安年間, 兵衛志殿御返事

(愛媛大学教授)

新刊紹介

沖本 克己 編

『新アジア仏教史7 中国Ⅱ  
隋唐 興隆・発展する仏教』

A5版・512頁・本体価格4,000円  
佼成出版社・2010年6月